宇宙衛生博覽會

筒井康隆

新潮文庫

うちゅうえいせいはくらんかい
宇宙衛生博覧會

新潮文庫　　草171＝15

昭和五十七年八月十五日印刷
昭和五十七年八月二十五日発行

著者　筒井康隆

発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社　新潮社
郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四四〇
振替　東京四―八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

㊥ 印刷・大日本印刷株式会社　製本・憲専堂製本株式会社
© Yasutaka Tsutsui 1982 Printed in Japan

ISBN4-10-117115-7 C0193

新潮文庫

宇宙衛生博覽會

筒井康隆著

新潮社版

2882

目次

蟹甲癬……七
こぶ天才……二一
急流……四一
顔面崩壊……五九
問題外科……七三
関節話法……一〇一
最悪の接触（ワースト・コンタクト）……一二七
ポルノ惑星のサルモネラ人間……一五九

解説　関井光男

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

宇宙衛生博覽會

蟹甲癬

かにこうせん

クレール蟹の祟りに違いない、と、最初は誰もがそう思った。そう思ったのも無理はなく、とにかくクレール植民地における人間たちのクレール蟹に対する態度というものは「外惑星植民地に於ける現地生物との接触に関する条例」などおよそ無視したひどいもので、この十二本足の大型蟹を殺して殺して殺しまくったのだ。もっともクレールへやってきた植民地人、以下はクレール人と呼ぶが、そのクレール人たちにしてみればクレールで他に目ぼしい動物性蛋白質はなかったのだから、個体数の少ないクレール蟹を他の誰かに食べられてしまわないうちにと競争でむさぼり食ったのであり、これは少しでも地球から持ってきた食糧をながく食いのばし、いつ来るかよくわからない次の便を待つ間の不安をちょっとでもなくそうとしたのだから、人間よりも他惑星の下等生物の方が大事と考える臍まがりでない限り彼らを責めることは誰にもできるまい。責めるとすれば、クレールにおけるたったひとりの環境調査官たるおれの役目であろうが、おれだってクレール蟹はずいぶん食い、あまりの旨さに自制しかねて絶滅寸前であることを知りながらまだ食ったのだからひどいものだ。

クレール蟹の旨さ、特にその甲羅の裏の、俗に蟹の味噌とか蟹の脳味噌とかいわれているあのペースト状の白い脂肪の、頬が落ちそうな美味等に関してはくだくだしい説明を省略し、さっそく、のちに蟹甲癬症と名づけられたあの皮膚疾患がクレール人の間に蔓延しはじめた頃の

騒ぎにまで話をとばすことにしよう。蔓延はまたたく間であった。まず皮膚が乾燥している老人、特に五十歳以上の男性の中から、左右どちらかの頬の皮膚の角質化とそれに伴う痒みを自覚し、訴える者が出はじめた。痒いものだから頬をばりばり掻きむしると、角質化した白い表皮がぽろぽろと剝落し、さらに掻き続けると真皮が破れて血がにじみはじめる。この真皮の壊死した組織がまた角質化し、それは以前のものよりもさらに硬くなって、次第に赤褐色を呈しはじめ、やがて硬さといい色といい、また形といい、ちょうどクレール蟹の甲羅を頬へ張りつけたようになる。これこそが症名の由来なのである。症状がここまで進んでしまうともう痒みはなくなる。そしてしばらくはそのままの状態が続くのである。

原因不明で治療法も見つからぬまま、患者はどんどんふえていった。医師の水戸辺先生は最初老人性の皮膚疾患であろうと考え、患者に栄養剤や栄養クリームをあたえているだけだったが、それによって病状の進行を食いとめることができないことはすぐにわかり、これは風土病であろうと考えなおし、あわてて細菌学者の承博士やおれの協力を求めてきた。

おれたちは患者を片っぱしから調べ、壊死した頬の組織を観察した。患者の大きく開いた口腔を覗きこんで頬の患部の裏側を見るとそこも角質化していることが認められ、外科的に患部を除去することが不可能であることをおれたちは知った。じつは比較的裕福な老人の患者が疾患初期に水戸辺先生のところへやってきて、手術によってこのいまいましい皮膚を剝ぎとってくれと頼んだことが二、三度あったらしい。水戸辺先生は拒んだらしいが、もしやっていたら

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

大変、頰にぽっかりと大きな黒い穴があくところだったのだ。角質化は頰の薄く柔らかい筋肉にまで及んでいたのである。

承博士は切りとった患部の組織から、このクレールの海水中に多く見かける連鎖球菌を発見した。これはもともとクレール蟹に寄生している細菌だったのだ。しかし、クレール蟹を食べたためにこの細菌が人間へ移ったのか、あるいはクレール蟹がいなくなって宿主に困ったこの細菌が人間を新しい宿主に選んだのか、そこまでは承博士にもわからなかったようだ。

承博士が疾患の原因をほぼこの細菌と考え、仮に蟹甲癬菌と名づけたこの連鎖球菌が嫌う物質を発見しようとして研究している最中、患者の一部の者が自分の頰の甲羅を自由自在に取りはずしたりもとへ嵌めこんだりしていることが判明し、またもや大騒ぎになった。これをいちばん最初にやりはじめたのは市のはずれにひとりで住んでいて日中は他の連中とウラニウム鉱山で働き、日没後は海へ出て残り少ないクレール蟹を漁るという日課をくり返していたロドリゲス爺さん。ある夜頰の蟹甲癬をいじりまわしているうちにぱっくりと甲羅がはずれ、頰に楕円形の穴があいて奥歯と歯茎がまる出しになってしまった。びっくり仰天した爺さんが大あわてで鏡を見ながらなんとかもと通り頰に甲羅を嵌めこもうとして周囲の皮膚をつまんだり引っぱったり苦心していると、今度はぴったりともとに納まった。コツさえわかれば簡単に取りはずしできることを知った爺さんが、近所の子供たちの人気を得ようとして腕白連中を集めこれをやって見せているうち、母親たちが騒ぎ出した。

「やめてください」
「グロテスクです」
「子供たちにあんなものを見せるなんて、悪趣味だわ」
噂が市内に拡まると、もしかしたらおれにもできるかもしれんと考えて患部の取りはずしを試みる老人たちや、また、隣りのお爺ちゃんにできるのならうちのお爺ちゃんにもできる筈というので孫にやって見せろとせがまれ、しかたなくはずして見せる老人もいて、そのうち、どうやら患者がすべて甲羅を自由自在に取りつけ取りはずしができるらしいということは明確になってきた。
「ずいぶん変な病気ですなあ」
おれと承博士と水戸辺先生は、承博士の研究室に集まって善後策を相談した。クレール植民地市民二千八百名の生命はおれたち三人が預っているといってもいいのだから、責任は重大である。
「あの、甲羅の取りはずしの頬べたぱっくりこ、禁止するよろし」と、承博士はいった。「症状これから先、どう進行するか、わたしたちまったく予想できとらんのことよ。あの黴菌、何食べているかもよくわかっていないある」
「頬の筋肉に寄生しているんじゃないんですか」
「ところが頬べたの筋肉壊死しても他のところに症状あらわれない。もう片方の頬べた、不可

思議のことに、なんともない。どこに潜伏しているかもわからないのでたいへん困るのことな。手の打ちようないよ」

「患者の誰かが死ねば解剖できるんですがね」五十六歳の水戸辺先生が、頬をばりばり掻きむしりながらいった。どうやら彼も蟹甲癬菌にとりつかれたらしい。

「クレール蟹の捕獲は全面禁止しました」と、おれはいった。「もとの個体数に戻って安定するまで、だいぶかかるでしょうが」

甲羅の取りはずしは見る者に不快感をあたえるので、ひと前では慎しむようにとの警告が全市に行きわたり、大っぴらにこれをやって見せる老人の姿は滅多に見かけなくなった。症状の進行も停まった様子で、これ以上悪くはならないのかと思っておれや先生や博士がややほっとしかけた時、またまた変な噂を耳にした。

噂の主は七十二歳ですでに隠居している前クレール市事務官のマックス氏である。このマックス氏がある夜自分の部屋で、ひとりこっそり頬から取りはずした甲羅をつくづく観察しているうち、たまたま、いつの間にか甲羅の裏側に、ちょうどクレール蟹の甲羅の中にある例の白いペースト状の「脳味噌」のような物質が多量に付着していることに気がついた。そこでさっそく、ためしに指さきでこそげ取って食べてみたというのであるが、ここが老人の無神経なところで、よくぞまあ、自分の皮膚病の患部を食う気になったものだ。しかし勇気をふるって食べてみただけのことは充分あったらしい。なんとそれは、あの美味なクレール蟹の「脳味噌」

そっくりの味だったというのだ。この話を聞き、さっそく自分の頬の患部から「脳味噌」をこそげ落して食べはじめた老人もいるらしい。味がひとによって違うということもなく、いずれもクレール蟹の甲殻内の脂肪そっくりの旨さであるという。そんな不潔なものをよく平気で食えたと思うが、他人のものならともかく、自分の肉体の一部に発生したものであるから、ちょうど子供が自分の瘡蓋をひっぺがして食うようなもので、わりあい汚さを感じないのであろう。

この話を聞いておれたちはまた心配になり、そんなものを食って生命に別条はないのかと、さっそく患者の患部から少し採取してきた「脳味噌」を分析してみた。しかし承博士の分析によれば成分は高分子の蛋白化合物であったらしく、これはどうやら患部の組織と崩壊した蟹甲癬菌が混りあってできた物質であろうということになり、食べてもたいした害はないことがわかったので、特に食うなという警告は出さぬことにした。あまりさまざまな警告を矢継ぎ早に出しても効果はない。

クレール蟹の「脳味噌」があんなに旨かった理由は、寄生していた連鎖球菌のためであったようだ。ではあの連鎖球菌を研究すればすばらしい調味料が発見できるのではないか、と、おれはそんなことを思った。しかしそのような呑気なことを考えている場合ではなかった。患者はどんどん増加し、爺さんだけに限らず婆さんや中年の男性にまで疾患は拡がりつつあったのだ。水戸辺先生も承博士も、そろそろ取りはずしができると思える大きさの甲羅を片頬に張りつけていた。

蟹甲癬のことは地球にも伝わったらしく、ぱったりと貨物の便が来なくなった。見捨てるつもりはないのだが、伝染を恐れて行く者がいない、もう少し待ってくれという連絡が多くの中継衛星経由で二、三度あり、その連絡さえすぐに途絶えた。見捨てるつもりなのである。たちまち食糧事情が悪化した。栽培しているクロレラだけが頼みの綱となり、なんとかこのクロレラ以外に現地で栽培できるものはないかと皆が食いもの捜しや菜園作りにけんめいとなったため、またたく間に鉱山は荒れ、採掘機械は錆びはじめた。ウラニウム鉱を採掘したって、取りにくる船はどうせ一隻もないのだ。

動物性蛋白質が不足してくると、蟹甲癬症患者にとっては自分の患部の「脳味噌」が貴重な栄養源になってくる。なぜかこの「脳味噌」、全部残らず舐めてしまっても、頬に嵌めこんでさえおけば次の日にはちゃんと甲羅の裏に何十グラムかが付着していて、なくなるということがない。孫や近所の幼い子供たちにせびられ、甲羅の裏を舐めさせてやる老人もいて、最初のうち母親はじめ家族の者はこれを汚いと思って厭がったが、老人に食わせてくれるなと頼むと、旨いものはよく知っていて不潔さなどなんとも思わぬ子供たちが、あの「頬が落ちる」ぐらいおいしいお爺ちゃんの頬っぺのお味噌が食べたいと泣きわめき、老人も「脳味噌」を子供たちに舐めさせていると自分の肉体の一部を彼らに頒ちあたえているような気がし、これにはなんとなしに動物的本能に通じる快感があるので食わせたがる。そのうちいよいよ食いものが欠乏し、患者が自分の「脳味噌」を食うことが常識となり、誰もおかしいと思わなくなってくると、

家族の者も子供のおやつを提供してくれる老人に感謝さえするようになった。

患者数の方はどんどんふえて低年齢層へと拡がっていき、中年女性からついには青年男女にまで及んだ。比較的初期に感染した若い娘の中からは自殺者さえ出たが、やがて、ちょっと町を歩けば子供を除くとその辺にいる人間みんな頬に蟹の甲羅をひとつずつへばりつけているという有様になったため、苦痛がないせいもあってさほど気にする者もいなくなってきたようであった。むしろまだ罹患(りかん)していない者が甲羅の中の珍味を食いたがり、寝ている間に甲羅を盗まれたという頬べた盗難事件さえ起った。

おれ自身もある晩夢うつつで痒い頬を掻きむしったため、朝にはくっきりと右頬に暗赤色の蟹の亡霊が浮かびあがっていて、ついに蟹甲癬症患者の仲間入りをすることになった。こうなってくるともうやけくそ、一日も早く自分の頬の「脳味噌」を食いたいものだと居直って、症状の進行を待ち望む気になり、今さらあわてふためくこともない。

とうとう患者の中から死者が出た。といっても蟹甲癬のためではなく、心臓病によるものであることははっきりしていたから、誰もあわてたり恐れたりする者はいなかった。死んだのは六十九歳のモハンダス爺さん。ながらく採掘場の監督をしていたのだが最近急に惚(ぼ)けてきて人の名前がわからなくなったため隠居していたのだ。心臓は中年以後の持病で水戸辺先生が診療していた。われわれはこのモハンダス爺さんを解剖し、蟹甲癬菌の人体寄生ぶりを徹底的に追求することにした。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com